

句集

# 清閑

Seikan

磯貝尚孝

*Isogai Naotaka*

浅草に

田んぼのむかし

泥鰌鍋

今の浅草では田んぼの風景は想像しにくい  
が、作者の生まれ育つた足立には江戸の頃の農の風景を思い起させる原風景があったのだろ  
う。「沖」主宰 能村研三

焦げ色のほのかに匂ふ雑煮餅

いまはむかし御用始の茶碗酒

としつきを木肌に刻み梅真白

姉も娘も近くに住みて雛の日

背の児の指さすままに春の道

蒲公英や歩いて近き父母の墓

思ひ立つ事もなけれど西行忌

花冷えの机上にひらく山家集

たたなづく山を煙らせ春の雨

春宵のかはらけに酌む濁り酒

花片の蓋ひし土のやはらかき

一雨にいのちみなぎる春の草

陽炎や小腰をかめ母の過ぐ

父の手の土に塗れし穀雨かな

短夜や若かりし日の夢に覚め

来し方を肯ひ今朝の草をとる

太梁に煤のいろ濃き迎へ梅雨

地下街を過ぎて再び梅雨の傘

浅草に田んぼのむかし泥檜鍋

噴水や程なく昼のコンサート

夕虹を見よと嫁ぎし子の電話

風鈴やしづかに時の流れをり

木漏れ日の斑に残る暑さかな

朝顔や勤めし日々の遥かなる

清閑とふ余生のありて遠花火

行き逢ひの空を掠めて流れ星

父祖の地に今も住みをり魂祭

墓洗ふ元祿の文字あざやかに

ほほづきや父母を迎ふる青畳

今生の一日いとしみ花むくげ

道の辺に瑠璃を散らして蛍草

菊の日や古びし杜甫の文庫本

打ち出しの櫓太鼓に月のぼる

祖師堂の檜皮のいろも雁の頃

秋麗の裳裾を引いて津軽富士

太棹のしらべ哀しき夜長かな

藁屋根の村を見下ろす芒の穂

星空の近さ身にしむ飛驒の宿

有限と無限のあはひ鳥わたる

一湾をかこむ灯のいろ十三夜

父の名に新てふ字あり今年米

菊を採る肩書のなき十年まり

残照のなほし  
ばしあり草紅葉

笛の音を夜風  
にたどる一の西

振袖は祖母が  
手縫ひの七五三

老松に実生え  
のむかし千歳飴

ひ  
ひ  
ら  
ぎ  
の  
花  
の  
匂  
へ  
る  
門  
構  
へ

冬  
ぬ  
く  
し  
庇  
の  
ふ  
か  
き  
父  
母  
の  
家

手  
の  
ひ  
ら  
の  
皺  
の  
深  
さ  
も  
十  
二  
月

さ  
り  
な  
が  
ら  
美  
味  
の  
悲  
し  
き  
薬  
喰

著者略歴

議員尚孝 いそがい・なおたか

昭和18年 東京都生まれ

平成20年 NHK文化センター柏教室（講師・北川英子）受講

平成22年 「沖」入会 能村研三に師事

平成25年 俳人協会会員

平成27年 「沖」同人

句集 清閑

せいけん

平成二十九年九月二十日 初版発行

著者◎議員尚孝

発行人◎西井洋子

発行所◎株式会社東京四季出版

〒119-0603 東京都東村山町東町二丁目三十二番八

電話 ○四二二三九六二二八〇

FAX ○四二二三九六一八一

mailto:shokun@shokun.co.jp

http://www.shokun.co.jp/

印刷・製本◎株式会社シナノ

定価◎本体二七〇円＋税

© Isogai Naotaka 2017. Printed in Japan  
ISBN978-4-8129-0912-6

※電子版はあとろかえいたします